続きを考えることで、楽しみながら読解力を養う小説の指導
～南木佳士『急須』の指導案～

１　小説の続きを考える授業

かつて中島敦『名人伝』や鷺沢萠『卒業』を教材にして、ストーリーの展開を考えながら、小説を読む楽しみを味わう授業を工夫してみたことがある（この実践については、次のサイトに掲載してある：http://decfamily.p1.bindsite.jp/2015/cn24/pg300.html）。本文を途中まで示して、その続きがどのような展開になるのか、個人で、あるいはグループで考えさせて発表させ、教室全体で共有しながら読みを深めるというものである。続きを想像するということで、積極的に作品に関わり、それが読みを深めたり、面白さを味わったりすることに結びつくことを期待したわけである。

今回、高校１年生（国語総合）の授業で南木佳士『急須』という作品を題材に、同じような小説の授業を工夫してみた。

現任校では、年度当初に年間指導計画を示し、教員はそれに従って授業を展開することになっており、国語総合５単位では、現代文分野２単位＋古典分野３単位で時間配分し、定期考査も共通問題で実施する。今年の１学年の国語総合年間指導計画では、小説教材として前期に『羅生門』、後期に『急須』を学ぶことになっている。『羅生門』については、入学後最初の小説教材でもあるし、また、定番教材として数多くの教材研究が発表されていることもあり、発問を中心とした講義形式で授業を展開した。一方、『急須』については、生徒たちの相互理解、また、私と生徒との関係も深まっている後期に扱う二番目の小説教材であることも踏まえて、小説の読解力を養うことを基本にしながらも、教室のみんなで小説を読むことの楽しみが味わえるような、グループワークを中心に据えた授業展開を計画することにした。

２　教材『急須』（南木佳士）について

南木佳士『急須』は、現在医師となっている主人公が、自己の子ども時代と医学生時代を振り返る回想形式の物語である。

主人公は、早くに母を失い、弟とともに祖母の元で育てられ、小さな頃から急須磨きを趣味としていた。中学１年生の春に、再婚した父の転勤に伴って東京に移ることになり、その後「そこそこの中流生活を営めれば十分と納得して東京から秋田まで都落ちして」医学生となる。しかし、単調な田舎暮らしと「生きた患者との接触はまったくない」、「教科書を読めば分かる程度の講義を聴きに大学まで通う単純労働に四年間ですっかり飽きてしま」い、軽い鬱状態に陥ってしまう。そんな時、いきつけの銭湯のそばの茶店に偶然入って、文学好きの主人と知り合う。主人公はその主人と三ヶ月後に再会を果たすのだが、それは臨床講義の場であり、医学生と患者としてであった。しかし、その主人を自身で触診したことと、病状に関する教授の講義とがきっかけとなって、「初めて聴いた臨床講義であったが、患者がたまたま知った人だったという以上に、医学がまさに生きている人間を扱う学問なのだとの印象を強く与えてくれた。学ぶべきものの輪郭が見えてきた。この講義を聴くために大学に行こう。」と決意を新たにする…とストーリーが展開する。

この作品では、タイトルの急須が主人公の心情を象徴する働きをしている。急須磨きに熱中することは、主人公が目の前の現実（課題）から逃避していることを表し、逆に、その急須を投げ捨てようとする行為には、その現実（課題）に立ち向かおうとする姿勢が表されている。大きな３つのまとまりから構成されているが、１つめのまとまりの最後では、東京への旅立ちにあたって、今までの自分と決別するかのように急須を割るさまが印象的に描かれる。そして、医学への決意を新たにする２つめのまとまりを受けた３つめのまとまりの最初でも、その思いを示すために急須を割ろうとする（実際は割らない）姿が描かれる。そして、作品の末尾は「気がつけばあれから一度も急須を磨いていな

い。」と巧みにまとめられることになる。

３　この授業について

そこで、この急須を磨く・割るという行動、さらに、新たな登場人物との出会いに注目しながら、大きく６つの場面に分け、作品全体を読むことなく、まずは一枚目のプリントの範囲を読ませて続きの場面を想像させ、それを踏まえて次のプリント読みながら、さらに続く場面を想像させる…ということを繰り返しながら、作品全体の読解を試みる授業を考えてみた。次がどうなるか分からないまま場面ごとの分析を積み重ね、次の場面への興味を持続させることで、積極的な読解姿勢を引き出そうと考えたのである。

生徒たちには、「続く場面のストーリーを考える」ということが今回の授業の第一目標であると伝えた上で、そのためには、「伏線」を注意深く読み取る必要があることを説明しておく。伏線になりそうな表現を見つけながら、その表現が次の場面にどう結びついていくのか、そして、その結果としてどのような話の展開となって物語が進んでいくのか、といったことをしっかりと意識させ、続く物語を想像する際にも、漫然と恣意的に想像するのではなく、「ここにこのような言葉・表現があるから、こういう展開になるはずだ」という、ストーリー想像の根拠を意識させるようにした。

このような観点から丁寧に本文を読むことで、より丁寧に人物像を捉えたり、小説の構造や表現の工夫をより細やかに理解することが可能になると考えたのである。

４　授業の実際

●１時間目の授業展開例

○これから展開する授業の目標や進め方を説明し、それに伴って「伏線」について理解させることが指導目標となる。また、とりあえず書くことにも挑戦させ、書いた結果に関しては、グループからの発表を大切にして（褒める、板書するなど）、以後の積極的な取り組み姿勢を引き出すように工夫する。

１　授業の目標や進め方を説明する。（「ノーベル賞作家を目指そう！」）
　＊教科書教材を学ぶが、教科書は使用しない。
　＊予習したり、教科書を見たりしてはいけない。
２　伏線について解説する。
３　プリントした「空欄本文①」を配り、指名して音読させる。
　＊授業に際しては、本文の一部（生徒に創作させる部分）を空欄にしてある「空欄本文」と、空欄のない「本文」をそれぞれプリントで用意しておく。
４　難しい表現や語句を確認する。（例：急須）
５　おおよその字数を知らせ、自由に空欄部分の内容を創作させる。（創作用に原稿用紙を配布する）
　＊生徒に与える指示例
　　①字数は目安であり、創作する際はそれよりも多くても少なくても構わない。
　　②うまく文章化できそうにない人は、どのような内容が入りそうか、項目をメモ風に箇条書きにしてもよい。
　　③自分の考えたストーリーは、どの表現を伏線として考えたのか、本文に傍線などの印をつけておく。
６　４名でグループをつくり、それぞれが創作した「空欄本文①」のストーリーを読み合う。
　＊グループ作成時のポイント例
　　①着席順にグループを作成する。（できれば男女バランスよく作るのがよいが、現任校では

自由な席替えが行われており、グループを作成すると、男子のみや男子１名といったグループも出来てしまうが、この授業のみでなく、日常的に短時間のグループワークを実施そているので、いつも通りに座席順でグループを作成した。）

②必ず机を移動してくっつけさせ、グループの形をつくる。

③その日の司会（発表）役をあらかじめ指名して（これも座席位置による）、グループの話し合いを活性化させる。

7　「急須をどうしたか」について、各グループで多かった意見を発表させて確認する。

＊「割る」が多いが、「東京に持って行く」という意見も多い。

8　その他、面白い内容の創作例があったら発表させて共有する。

＜資料＝空欄本文①＞　　★～★の部分を空欄にしてある。また、実際は縦組みである。（以下同じ）

急須①　　南木佳士

小学生の頃、趣味といえば急須を磨くことだった。安価な万古焼の急須を乾いた布巾でこすっていると、やがて艶が出てくる。それが無性にうれしくて毎日磨いていたのだった。

群馬の山村の古い家で、掘りごたつにあたりながら、あるいは縁側に腰かけて祖母の茶飲み話を聞いていた。テレビのない時代だったので、お婆さんたちの雑談に耳を傾けているより他に時間のつぶしようがなかったのだ。田舎育ちの子のくせに、友だちと外で遊ぶのは好きではなかった。

となりのしまちゃんや、そのとなりのおよねさんなどが祖母の茶飲みの相手だった。およねさんはすでにぼけかかっていて話がよく分からなかったが、しまちゃんはときおり怖い話題を口にした。

秋の台風で山向こうの村の裏山にある墓地が崩れ、流された。翌朝、山の斜面に建つ家の主が裏にたまった土砂をスコップで片づけていたら、土の中から一カ月前に土葬にしたばかりのその家のお婆さんが立ったまま出てきた。

しまちゃんの話はそれだけだったのだが、思わず急須を磨く手を止め、

「おっかねえなあ。」

と、声を震わせてしまった。

「死んだもんなんぞ、なんのおっかねえこんがあるべえかな。ふんとにおっかねえのは生きてるもんのここだわな。」

しまちゃんは笑いながら白髪の乱れる自分の頭を指さしていた。

こんなふうに、老婆たちの会話は含蓄に富み過ぎていたから、幼かった小学生には十分に消化できなかった。だから、それらの断片はそのままのかたちで今でも記憶の倉庫の片隅に保存されている。四十歳の峠を越えた頃より、古びた一言半句の真意がふと理解できる瞬間が訪れるようになった。しかし、懐古の微笑は浮かばない。むしろ、このまま坂を下ってゆけば、あの頃の老婆たちの年齢に限りなく近づきつつあるのだと自覚させられて呆然としてしまうのである。

急須磨きの趣味は中学一年まで続いた。週に一度、鉱山の社宅から帰ってくる父は急須などにうつつをぬかしている長男を厳しくしかっていた。

「そんな老人くさいまねはやめろ。」

父のヒステリックな言葉の裏には祖母への反感が込められているようだった。

婿としてこの家に入ったものの、妻に先立たれてしまい、その後に再婚して家を出た彼の複雑な立場がおぼろげながら理解できるようになったのは大学生になってからのことだった。祖母は母の死後さっさと再婚を決めた父をこころよく思っておらず、孫たちはおれが育てるから、と強く主張していたらしい。

父としては二人の子供を鉱山の社宅に引き取って新しい妻とともに暮らしたかったのだろうが、すっかりお祖母ちゃん子になってしまっていた子供たちは彼について行くのを泣いていやがった。しかたなく、週末に帰って一日だけ子供たちの顔を見、またバイクで二時間かかる鉱山にもどる生活を続けていたのだった。

自分の足場である家庭がそんな不安定な状況に置かれているのは子供心にも肌で感じていた。そ

んなわけで、急須磨きにのめり込むことで崩れそうになる精神の平衡を保とうとしていたところもあったのである。
　しかし、三カ月も磨いてようやくいい艶が出始めたなと思う頃、必ず注ぎ口の先をどこかにぶつけてかいてしまった。祖母はそこに透明なビニールの管を切ったものを押し込んで平気な顔をしていたが、どこかがかけ、完全なかたちを保てなくなった急須にはすぐに興味がなくなり、それ以上磨く気がしなくなった。
　「急須は茶をいれるもんだから、茶がはいりゃあいいだんべや。」
　祖母が懸命になぐさめてくれたのだが、一度ふてくされてしまうと手がつけられず、飯も食わない、学校にも行かないありさまだった。根負けした祖母が新しい急須を買ってくれると、即座に態度を変え、へらへらと創り話などしながらひまさえあれば磨いていた。
　中学一年の終わる春、一足先に東京の鉱山会社の事務職となって東京に出ていた父について転校することが決まった。その頃、運よく二年間もかけたところのないまま磨いてきた急須があった。黒く錆びた鉄の玉を油で磨きあげたような、硬質の光沢を放つ急須だった。
　明日東京に旅立つ日、その急須を手にして谷間の集落の底を流れる川の岸に立った。ネコヤナギの固い芽に春の予感はあったが、川面を吹く風の冷たさはまだ冬のそれだった。
　★何度かためらった。このまま東京に持って行っても、それはそれでいいのではないかと妥協に傾きもした。だが、ふいにセーターの背を押した突風にうながされて、急須を思いきり投げ出した。
　澄んだ青空を背景に鈍い光を放ってから、急須は川の中心にある大石に落ち、砕け散った。雪解けの増水が始まっている川音に消されて、割れた音は耳に届かなかった。その分だけ、頭の中に鋭い破砕音が創り出されてしまい、家にもどってからも耳の奥で執拗に反響し続けていた。★

　再び急須を磨き始めたのはそれから十年後、秋田で医学生として暮らして四年目の秋だった。

●２時間目の授業展開例　　＊この時間はグループワークは実施しない

○「空欄本文①」では、主人公が登場する。そこで先ずは主人公の人物像を読み取ること、そして主人公にとっての「急須」の意味を考えることが指導目標となる。

0　「空欄本文①」を使用する。
1　主人公の人物像について考える。
　発問例　○語り手が主人公だが、名前は？　語り手は自分のことを何と表現しているか？
　↓　　→実は主語が一度も登場しない。
　↓　○どんな性格か、考える根拠となる箇所を抜き出しなさい。
　↓　○その上で、どのような人物か、自分の言葉でまとめなさい。
　↓　○どんな家庭の状況に置かれているか、考える根拠となる箇所を抜き出しなさい。

板書例

＜主人公＞　（現在は四十歳を超えている）
●性格
　○趣味＝急須磨き
　○友だちと遊ぶのは好きではない
　○お祖母ちゃん子
　○ふてくされると手がつけられない
　　→内向的な性格　同年代との人づき合いが苦手
●家庭環境
　○群馬の山村で祖母と暮らす

○テレビのない時代
○弟がいる
○母は亡くなっている
○父は再婚して鉱山の社宅に住んでいる
　→不安定な状況
○中学１年の終わる春　東京へ転校
→新たな出発

2　急須の意味を考える。

発問例　○主人公にとっての急須磨きの意味が書かれている部分を抜き出しなさい。
↓　　→崩れそうになる精神の平衡を保とうとしていた
↓　　○急須磨きが、主人公にとって精神の平衡を保つための作業であることがよく分かるのは、どのような点からか。
↓　　→不完全な急須では我慢できない点
↓　　○「二年もかけたことがない」からどのようなことが読み取れるのか？
↓　　→心の平衡が保たれていること　＝　主人公の成長

板書例

＜急須磨き＞
　＊祖母にとっては「茶を入れるもん」
　○「趣味」というよりは「崩れそうになる精神の平衡を保とう」とするもの

3　東京へ行くことの意味を考える。

発問例　○（成長した）主人公にとって、東京に行くことはどういう意味があるのか？
　　→新しい出発　過去の自分との決別

4　自分の創作をもう一度読み、書き足すことがあれば書き足させる。

5　空欄のない「本文①」プリントを配布して読ませる。

6　「本文①」と自分たちの創作との差について考える。

発問例　○急須を投げた理由は？
　　→新しい生活　過去との決別
　　○「本文①」で加わっている要素は何？
　　→割れた音が耳に届かなかった（音が聞こえない）
　　○それは何を表すか？
　　→不完全な決別　決別しきれない部分が残ってしまった
　　＊次のまとまりの冒頭が「再び急須を磨き始めた」であることに注を喚起させる。
　　＊生徒の創作本文は、今回は回収しない。

●３時間目の授業展開例　　＊この時間はグループワークは実施しない

○「再び急須を磨き始めたのはそれから十年後」とあり、主人公にとっての急須磨きの意味を振り返りながら、主人公の変化を捉えることが指導目標となる。

1　「空欄本文②」を指名して音読させる。

2　気になる語句・表現があれば挙げさせて確認する。

3　主人公の変化を考える。

発問例　○どういう学生だったか？
　　→大学４年生の秋から出席率「０」

○それはなぜか、理由が書かれている部分を指摘しなさい。
→北国の小都市の生活に飽きる
漫然と医者になることへのためらい
→軽症うつ病
○子ども時代の主人公と結びつく部分を挙げなさい。
→老人たちと一番湯に入った。すると心身ともにすっきりしてなんでもできそうな気になってくる

4　事項の確認

発問例　○３０００円は、現在のいくらくらいに相当すると思うか？
→いつの話か？　「テレビのない時代」
→作者は昭和２６年（１９５１年）生まれ
○現在の国立大学の授業料はいくらか？
→５３５８００円　（私立平均８６万円）
一月４４６５０円×３＝１３３９５０円

5　おおよその字数を知らせ、自由に空欄部分の内容を創作させる。（創作用に原稿用紙を配布する）
＊１時間目と同じ指示を与える。
＊２回目なので、作業はスムーズに進むようになる。
＊宿題とはしないが、次時はそれをグループで読み合うことから授業を開始する旨伝え、なるべく完成させておくように指示する。

＜資料＝空欄本文②＞

急須②

再び急須を磨き始めたのはそれから十年後、秋田で医学生として暮らして四年目の秋だった。大学では内科や精神科などの臨床医学の講義が行われていたが、出席する気力をまったくなくしていた。それでも夏休み前まではなんとか半分程度の講義には出ていたのだが、休み明けからは出席率ゼロになってしまった。

大学に行くつもりはあり、行かなくてはと六畳一間のアパートで目覚めはするのだが、布団の中で退屈な教室の様子を想像してしまうともうだめで、そのまま膝を抱えて再び眠ってしまうのだった。刺激の少ない北国の小都市での生活にすっかり飽きていたし、このまま漫然と医者になってしまうことへのためらいもあった。理由は後になればいくらでもつけられるのだが、このときはただ行きたくても行けなかったのである。大学に向かって自転車をこぎ出すと頭痛や吐き気がし、遠ざかれば症状は消えた。いかにも勝手すぎる体だとあきれ果てはしたものの、実際に気分が悪くなってしまうのだからどうにもならず、アパートの万年床に引き返して小説など読むしかなかったのだった。

午後三時になると銭湯が開く。老人たちと一番湯に入った。すると心身ともにすっきりしてなんでもできそうな気になってくる。なんのことはない、朝悪くて午後から夕にかけて気分が回復してくる軽症うつ病の症状そのものなのであるが、不勉強で無自覚な医学生が気づくはずもなく、なんとかその日その日をなだめ暮らしていたのだった。

銭湯の脇の狭い路地を入ったつきあたりにお茶を売る店があった。色あせた紺色ののれんに白く染めぬかれた「茶」の字が破れて読みにくくなっていた。

ある日、新装開店に並んで遊んだパチンコで三千円もうけた。国立大学の授業料が月千円だった頃の三千円である。風呂に入り、さてあぶく銭でなにかうまいものでも食うか、と外に出たら、この貧相なお茶屋が目に入った。そういえばこのところ上質な煎茶を飲んでいない。羊羹でも買って帰り、ゆっくりと茶でもいれようか、となんの気なしにきしむガラス戸を開けて店に入った。

三坪ばかりの店内は正面に茶袋の並んだガラスケース、右の棚に急須、左に湯飲みの棚があった。

主人は顔色のすぐれない坊主頭のやせた男で、ガラスケースの裏に座って本を読んでいた。丸い眼鏡をかけ、襟の汚れた白いワイシャツを着た彼の第一印象は、はやらない古本屋の店主そのものだった。
★いらっしゃいの言葉もなかった。とりあえず右側の棚を見てみると、いきなりかたちのよい常滑焼の急須に目を奪われた。片方の手のひらで包めるほどのかわいらしい円筒形で、注ぎ口と取手のバランスも絶妙であり、一瞬のうちに欲しくなった。
「これ、いくらですか。」
値札が付いていなかったので、急須を手に取り、ガラスケースの上に置いた。
主人はめんどくさそうに本から目を上げ、眼鏡を下にずらしてこちらを見た。黒ずんだ顔に似合わない澄んだ目だった。★
「三千円。」
喉のどこかから息のもれているようなか細い声だった。

●４時間目の授業展開例

○主人公にとって大きな意味を持つ新たな登場人物、茶屋の主人の人物像について確認することと、出会いによってもたらされた主人公の自己認識を考えることが指導目標となる。

1　４名でグループをつくり、「空欄本文②」の創作ストーリーを読み合う。
2　「三千円」について、各グループで多かった意見を発表させて確認する。
　＊多くの班が「右の棚の急須」から急須の値段と考えるが、このあたりになってくると授業にも（悪い意味で）慣れて、ユニークな意見も出てくるようになる。そういう楽しい意見も大切にしながら、「根拠となる伏線の表現はどこか？」という発問を用意することで、授業の方向性を維持する。
3　その他、ユニークな創作例があれば発表させて共有する。

4　新たな登場人物について考える。
　発問例　○もう一人の登場人物について書かれているところを指摘しなさい。
　↓　○もう一人の登場人物がどのような性格か､考える根拠となる箇所を抜き出しなさい。
　↓　○その上で、どのような人物か、自分の言葉でまとめなさい。

板書例
＜茶屋の主人＞
・顔色の優れない、坊主玉の、やせた男
・本を読んでいた
・丸い眼鏡、襟の汚れた白いワイシャツ
・か細い声
　→古本屋の店主そのもの

5　空欄のない「本文②」プリントを配布して読ませる。
6　読んだ感想をグループで自由に話し合わせる。面白い意見があれば発表させる。
　＊予想通りだったところや予想外だったところ、また、優れていると感じたところ、逆に、自分たちの発想の方がユニークであると思うところなどを発表させる。

7　「空欄プリント③」を配布し、指名して音読させる。
8　気になる語句・表現があれば挙げさせて確認する。

9　グループごとに空欄に入る内容を相談させる。（創作用に作文用紙を配布する）
＊今回の本文範囲では、創作させる部分が難しくなってしまうので、会話部分に絞ることで難易度を下げ、取り組みやすいイメージを作るようにした。

＜資料＝空欄本文③＞

急須③

「三千円。」
喉のどこかから息のもれているようなか細い声だった。
この主人を相手に値引きの交渉をするのは気乗りがしなかったので、ちょうどズボンのポケットにあった三千円を出した。
「学生さんかね。」
主人は無造作に置かれたガラスケースの上の千円札から目をそらすようにして下を向いた。
「はい、そうです。」
早く急須を手に入れたかったから、足踏みをしながら答えた。
「急須はバランスが命なんだよ。三千円も出して買うんだから、これだけは試しておかなくちゃいけないよ。」
主人はそう言うと急須の蓋を取り、取手を下にしてガラスケースの上にそっと立てた。
急須は立った。
「ほら、これがバランスのいい急須なんだよ。基本だよね。何事もバランスが基本だよね。」
主人は弱々しく笑ったが、上と下の前歯が二、三本抜けていて、そこから妙に赤い舌がのぞいていた。
「これ、サービスだから。」
ケースの中から百グラムの煎茶の袋を出す前に、主人は膝の上にのせていた本を端に置いた。
布の装丁が綻びかけた「芥川龍之介全集」の一冊だった。
★「芥川ですね。」★
サービスの煎茶をもらってしまって返礼の言葉がとっさに思いつかなかったものだから、精一杯の愛想笑いを造ってみた。
★「うん、そう、芥川。昔の本だけど、今読みなおしてみると、あらためていいよね。この急須みたいに、芥川の文章はバランスがいいよね。」★
煎茶をていねいに包装してくれながら話す主人の口調に秋田訛りがないことにようやく気づいた。
年齢は五十代の半ばくらいなのだろうか。芥川の話になると、か弱かった声にいくらか力がこもった。
★「芥川の作品ではなにが一番お好きですか。」★
純粋な本好きらしいと判断して遠慮なく聞いてみた。秋田に来てから、小説を読む友など一人もいなかった。
東京で過ごした中学、高校の間に、文庫本で手に入る芥川の作品はすべて読んでいた。もっぱらストーリーのおもしろさにひかれた子供っぽい読書体験ではあったが、それでもほんの少しだけ、小説を書くという行為の楽しさと恐ろしさを教わった。
「いつまでも芥川ばかり読んでいるのは幼稚だっていう人たちがいるけれど、『秋』なんていいよね。大人の小説だよね。みんなが思っている以上に芥川の作品て奥が深いような気がするんだよね。」
主人は座敷の上がり口に置いてあったポットのお湯を注いで茶をいれてくれた。
猪口に似た小ぶりな湯飲みに、丸く小さな急須で最後の一滴まで注いでくれた茶はさわやかな甘みを含んだ玉露だった。出された木製の丸椅子に坐り、ガラスケース越しに主人と向き合ってしばし芥川談議に夢中になった。

「『秋』には全体に大正末期の東京郊外の秋の空気が感じられるんだよね。セピア色で、品がいいんだよね。せつない恋の物語ではあるんだけれど、登場人物たちが澄んだ秋の大気にくるまれているから清潔で上品なんだよね。いいよね、『秋』は。」

互いに芥川の小説の中では『秋』が最高傑作であろうということで意見が一致したのだが、主人の淡々とした批評には押しつけがましくないやわらかで確実な説得力があった。うなずきながら聞いているうちに時の経つのを忘れた。

いつの間にか陽が暮れかけていて、路地の奥の店内は暗くなってきた。三杯目の玉露を飲み終えたところで椅子を立った。主人も芥川のものは若い頃にすべて読み終えているらしかったので、このまま話していたら夜になってしまいそうだった。

「いやあ、久しぶりに芥川の話ができて楽しかったですよ。またいつでも寄って下さいよ。」

主人は急須を灰色の布巾で包んだ上で、自転車だったらこうしておかなくちゃあ、と新聞紙を丸めて四方を押さえ、ガムテープでとめてくれた。

路地を出るところでふり返ると、夕闇におおわれたお茶屋はいたるところ板壁がはげ落ち、屋根のトタンも赤錆に侵蝕されつくしているとても貧しげな二階屋だった。なんでこんな店に入ってみる気になったのか。講義に出ないでいる間に体内の羅針盤が狂ってしまい、とんでもない迷路に入り込んでしまったのか。

正体不明の主人と文学の話をしたあとには、不思議な満足感とともに、手すりのない階段に足を踏み降ろしてしまったような全身で覚える頼りなさの感覚が残った。だから、アパートに帰る暗い裏道を、いつもより固くハンドルを握って自転車をこいだ。

●５時間目の授業展開例

○前時の続きである。

1　グループを作り、「空欄本文③」の創作を読み合う。
　＊短い会話部分なので、本文と同内容の創作例を示す生徒も多い。
2　ユニークな創作例があれば発表させて共有する。
3　主人公と茶屋の主人について考える。
　発問例　○登場人物に関する新しい情報を挙げなさい。
　↓　○主人公の心情が述べられている部分を指摘しなさい。
　↓　○どのような心情か、自分の言葉で説明しなさい。

板書例

＜店主・主人＞
・顔色の優れない、坊主玉の、やせた男
・本を読んでいた
・丸い眼鏡、襟の汚れた白いワイシャツ
　→　古本屋の店主そのもの
・か細い声　→　力がこもった
・秋田訛りがない
・年齢は五十代半ばくらい
・純粋な本好き
・淡々とした批評＝押しつけがましさがない・やわらかで確実な説得力

＜主人公＞
・小説を読む友だちなど一人もいない
　（←内向的）

・芥川＝文庫本はすべて読破
◎二人は「秋」を通して共感できる友と出会った
＜主人公の心情＞
・「迷路」＝大学の講義にも出ないで文学談義にふけっていた自分
・不思議な満足
場所や相手（お茶の主人）という思いがけなさ
主人の見識の高さ
・頼りなさの感覚
自分の現状の自覚（何をやっているのだろう？）
主人の芥川への思い入れに自分を重ね、再び急須磨きにのめり込みそうな不確かな感覚

4　「　」の内容を確認する。

発問例　○３つの「　」の発言者は誰か。
＊それぞれの「」の続きの部分がヒントになる。
○２つ目の主人の「　」にはどのような内容が入るか？　四字で抜き出す。
→芥川の話
○芥川の作品を、主人はどういう観点で評価すると思うか？　四字で抜き出す。
→バランス

5　空欄のない「本文③」プリントを配布して読ませる。
6　読んだ感想をグループで自由に話し合わせる。面白い意見があれば発表させる。

7　『秋』について、簡単に紹介する。
＊時間に余裕があれば、本文を配布して簡単な読解を試みたいところである。
8　プリントした「空欄本文④」を配り、おおよその字数を知らせ、自由に空欄部分の内容を創作させる。（創作用に原稿用紙を配布する。）
＊宿題とはしないが、なるべく次時までに完成させておくように伝える。

●６時間目の授業展開例　＊この時間はグループワークは実施しない

○引きこもり状態だった主人公が講義に出ざるを得なくなる場面である。主人公をとりまく状況の変化を捉えることが指導目標となる。

1　「空欄本文④」を指名して音読させる。
2　気になる語句・表現があれば挙げさせて確認する。
3　主人公の変化を考える（プリント内の第一段落～第三段落の間で答える）

発問例　○具体的にどんな生活だった　→昼頃～
↓　○その間、何をしていた　→急須磨き
↓　○なぜ急須磨きをしている　→焦燥を誘う～
↓　○このような状態を簡単にいうと　→引きこもり
↓　○なぜ引きこもっているのか　→中退する勇気・決断力なし
↓　○決断できないが生活はどうなのか　→病気の話がかり～

板書例
＜主人公の現状＞
・昼頃に起き急須を磨く　外出は二日に一度（風呂・買い物）
・三ヶ月、一度も講義に出ない

→昼夜逆転　引きこもり
・医学部を中退する勇気・決断力なし
・適当に医者になって中流生活　都落ち
（本文プリント②「漫然と医者になることへのためらい」）
・病気の話ばかり　生きた患者との接触なし
・生身の人間の生死と関われない
↓
●急須磨き
・焦燥を誘う内なる声が聞こえ出す前に
・どうしたらいいのか分からず

4　その生活の変化を考える。

発問例　○生活の変化のキッカケは何か？
→友人の訪問
○訪ねてきた友だちの主人公に対する思いが表れているのは？
→哀れみの色
○それが行動となって表れているのは？　他の同じような行動は？
→ダウンジャケットの肩の～
＝哀れみを悟られまいとして、必要最低限の連絡だけしてその場を離れた
○同じような心情を背景とする行動は？
→級友たちは気持ちよいほど無関心～
○もう一人の新しい登場人物は誰か？
→教授＝この秋から赴任（→主人公は初対面）

5　「空欄本文④」の空欄を、各自もう一度完成させる。
＊宿題とはしないが、次時はそれをグループで読み合うことから授業を開始する旨伝え、なるべく完成させておくように指示する。

＜資料＝空欄本文④＞

急須④
その夜から急須を磨き始めた。朱色の常滑焼には万古焼のごとき硬質の艶は望むべくもなかったが、朱は朱としてそれなりに磨き出すべき色ははっきりと頭に描けていた。祖母から聞いたところでは茶渋の染みた布巾でこするとよく光るとのことだったので、茶殻を布巾の上に捨て、よく揉んで乾かして磨き布とした。
昼頃に起き出し、食事をして茶を飲んでから急須を磨く。風呂から帰って磨く。夜も眠くなるまで磨く。
外に出るのは二日に一度風呂に行くときだけで、食事は昼と夜の二食のみ。それも風呂のついでにスーパーで買ってきたもやしと魚肉ソーセージを炒めたものやサバの水煮の缶詰などをおかずにして一回に二合の飯を食べていた。
住んでいたのは田んぼに囲まれたアパートだった。稲刈りや脱穀のにぎわいのあと、稲わらを燃やす煙が消え去るとともに周囲が深い秋の静けさに支配されてゆくのを窓の外に見ていた。おまえはなにをしているのだ、とのたまらない焦燥を誘う内なる声が聞こえ出す前に、せっせと急須磨きを開始し、飽きると文庫本の小説を読み、また磨き。
その年の秋は思いのほかの早さで深まってゆき、窓の外のいつにない明るさに驚いて早朝に起き出してみたら初雪が降っていた。九月から十一月まで、およそ三カ月間、一度も大学の講義に出なかったのである。医学部を中退するほどの勇気も決断力もなかった。金のない家に生まれ育ったので、好きな文学を勉強できるほど恵まれた境遇にないのもよく理解できていた。だからこそ、適当

に講義でも聴いて医者になって、そこそこの中流生活を営めれば十分と納得して東京から秋田まで都落ちしてきたのだった。
　しかし、医学部の六年間はあまりにも長かった。甘ったれるなと言われればそれまでなのだが、毎日病気の話ばかり聞かされ、肝腎の生きた患者との接触はまったくない。教科書を読めば分かる程度の講義を聴きに大学まで通う単純労働に四年間ですっかり飽きてしまった。医学部というところはもう少し生身の人間の生死にかかわる問題を学ぶところとわずかな期待を抱いていたのだが、それは見事に裏切られた。よるべをなくし、どうしたらいいのか分からなかったので、とりあえずそこにあった急須を毎日磨いていたのだった。
　初雪の日から二週間ほど経った夕方、こたつにあたって急須をこすっているところに、一年前の人体解剖実習でおなじ班にいた級友が訪ねてきた。彼は戸口に立ったまま用件だけを伝えた。
　今、大学では週に一度、臨床講義というのが始まっている。大学病院から患者を講義室に招いて学生たちが診察し、その所見を教授に報告する。患者が退出したのち、診察データなどをもとにして病気の診断法や治療法を教授が講義するものである。ついては明日、我々の班がその診察当番になっている。頭から足まで、四人で分担して診察するので、一人でもいないとまずい。おまえは腹部の担当だから、明日はぜひとも出てきてほしい。
　ダウンジャケットの肩の雪がとけない前に級友はドアを閉めた。聞いている間も口をぽかんと開けて急須を磨く手を休めなかった。級友の目には明らかに哀れみの色が浮かんでいた。
　講義に出ないのは自分の勝手だが、班の者たちに迷惑をかけるのは本意ではない。行くしかないか、とすこぶる消極的な背伸びをしてから、その夜、診察手技の教科書を引っぱり出して自分の腹をなでさすりながら急ごしらえの触診の練習をした。
　翌日、臨床講義は午後一時からの開講だった。数カ月ぶりに教室に入ったのだが、級友たちは気持ちよいほどに無関心でいてくれた。白衣を着て階段教室の最前列に座り、講義の開始を待った。
　前の右側のドアを開き、まず教授が登場した。この秋から内科学教室に赴任して来た人らしい。見事な白髪に銀縁眼鏡をかけたおだやかな人相の初老の教授だった。
　「本日の患者さんは五十五歳の男性です。それではお願いいたします。」
　壇上の教授の声とともに看護婦の押す車椅子に乗せられた患者が左側のドアから入ってきた。
　★あっ、と微かだが声が出てしまった。患者はお茶屋の主人だったのである。三カ月ばかり前に急須を購入した日以来会ってはいない。風呂の帰りに何度か店に寄ってみようと思ったりもしたが、新しい人間関係を築くのがなんとしてもおっくうだったので敬遠していたのだった。
　主人はあの頃よりひとまわりやせ、肌の色も一段と青黒くなっていた。パジャマ姿でうなだれたまま看護婦の手を借りて用意されていたベッドにあおむいて寝た。百人近い医学生たちの好奇の視線にさらされて、主人は目を閉じていた。★
　教授の指示にしたがって頭部の診察から始まり、学生がドイツ語で所見を述べていくと、教授は、そうですね、とか、もう一度診て下さい、などと言葉をかけていた。腹部の診察は三番目に回ってきた。目は固く閉じられていた。こんにちは、と耳に届く分だけの声をかけてから触診を始めた。

● 7時間目の授業展開例

○茶屋の主人の来歴を、これまで読んできた伏線をもとに考えさせることが中心となる。また、主人公を再び医学の道へ導き入れることになる新しい講義（新しい教授）との出会いについて考えることが指導目標となる。

1　グループを作り、「空欄本文④」の創作をグループで読み合う。
2　「五十五歳の男性」を誰と考えたか、確認する。
　＊主人公の「父」とするグループもある。

3　ユニークな創作例があれば発表させて共有する。
4　空欄のない「本文④」プリントを配布して読ませる。
5　読んだ感想をグループで自由に話し合わせる。面白い意見があれば発表させる。

6　「空欄本文⑤」を指名して音読させる。
7　気になる語句・表現があれば挙げさせて確認する。（例：学徒出陣）
8　「空欄本文⑤」の空欄に入る内容を各自メモする。

発問例　○この部分は誰の発言か。
○この部分は症状の説明ではなく、患者（主人）の来歴になっているので、その内容を想像して、箇条書き風にメモしてみよう。
○来歴の内容として、どのようなことが想定できるか。
・戦争でどうなったのか
・復員してからお茶屋の主人となるまでの生活はどうだったのか

9　作成した各自のメモをグループで読み合う。
10　主人公の来歴について発表させ、箇条書きに板書する。
＊「東京で国語の教員をする」という内容を入れるグループは複数ある。一方、結婚したかどうかについて触れるグループは少ない。
11　ユニークな創作例があれば発表させて共有する。
12　空欄のない「本文⑤」プリントを配布して読ませる。
13　読んだ感想をグループで自由に話し合わせる。面白い意見があれば発表させる。

発問例　○この教授の解説をどう思うか？
→単に病状の解説だけでなく、患者のプライバシーに踏み込む
＝医学とは何かを学生たちに語りかけている？
○それをどう思うか。
○「**この人の内なる戦争はまだ終わっていなかった**」とはどういうことか。

＜資料＝空欄本文⑤＞

急須⑤

教授の指示にしたがって頭部の診察から始まり、学生がドイツ語で所見を述べていくと、教授は、そうですね、とか、もう一度診て下さい、などと言葉をかけていた。腹部の診察は三番目に回ってきた。主人の目は固く閉じられていた。こんにちは、と耳に届く分だけの声をかけてから触診を始めた。

乾いた皮膚の下にすぐ大動脈の拍動を触れるやせきった体だったが、目立った異常は認めなかった。その旨を報告すると教授は黙ってうなずいた。

ほっとして視線を落とすと、主人はうすく目を開き、微笑みととれる表情を造った。覚えていてくれたらしい。なにか一言でも診察させてもらった礼を述べようとしたが、足の診察当番になっている次の学生が前に出てきてしまった。かろうじて目の縁をゆるめて返礼すると、主人はわずかに首を折ってくれた。

十分ばかりで学生たちの診察は終わった。お茶屋の主人はまた看護婦の手を借りて車椅子に乗り、教授の黙礼に送られて退出して行った。

「ただいまここにおられた患者さんは肺の小細胞癌、その中でもメラニン産生細胞刺激ホルモンを分泌する珍しい癌細胞を有する症例であります。」

教授の声は低いがよくとおった。

患者の肺癌細胞では皮膚のメラニン産生細胞を刺激し、色を黒くさせるホルモンが作られている。だから肌の色が独特の黒さになっていたのである。

スライドで提示された胸部Ｘ線写真には右肺の中央に大きな腫瘤影が映っており、中心に金属片と思われる濃さの陰影があった。
「患者さんは学徒出陣でフィリピンに出征し、★同地の戦闘で砲弾の破片を右肺に受けました。それがここに残っています。復員して大学を卒業してからは左肺の結核を発病して六年間療養し、以後は高校の国語の教師として東京で暮らしていましたが、両親が老いて病気がちになったために三年前に秋田にもどり、家業のお茶屋を継いでいました。結核のために婚期をのがし、現在も独身であります。もし、肺内の異物が慢性の刺激となって発癌することがあり得るなら、患者さんにとってこの砲弾の破片がまさにそれであります。そういう意味では、この人の内なる戦争はまだ終わっていなかったことになります。」★
教授は指示棒でスライドを指しながら淡々と講義を進めていた。
次いで肺癌の分類や診断方法などに話題は移っていったのだが、胸部Ｘ線写真のスライドの残像が目の奥にいつまでも消えず、ノートがとれないまま頬杖をついていた。
「小細胞癌は肺癌の中でも最も悪性度が高く、この患者さんの場合も予後は三カ月程度と思われます。本人は主治医から告知を受けておりませんが、おおむね病気については理解しておられるようで、残される老いた両親の心配ばかりされています。本日の臨床講義は、以上です。」
語り終えて教授は、大きく肩で息をした。
事実の壁の厚さと重さの前に静まりかえっていた学生たちの間にも、さざ波のようにため息が広がっていった。

●８時間目の授業展開例

○全体のまとめとして、急須がどうなるのかを考えさせることで、この小説全体を味わうことが指導目標となる。

1　プリントした「空欄本文⑥」を配り、指名して音読させる。
2　気になる語句・表現があれば挙げさせて確認する。
3　おおよその字数を知らせ、自由に空欄部分の内容を創作させる。
　＊授業終了時に提出させる旨伝える。

4　グループを作って、「空欄本文⑥」の創作をグループで読み合う。
5　急須がどうなったのか、発表させる。
　＊ここでも「割る」グループと、とっておくグループが出る。茶屋の主人の店に持って行く、墓に供えるといったアイディアも出る。最後の創作でもあり、短時間ながらさまざまなアイディアが提出された。
6　ユニークな創作例があれば発表させて共有する。

7　空欄のない「本文⑥」プリントを配布して読ませる。
8　読んだ感想をグループで自由に話し合わせる。面白い意見があれば発表させる。

9　各自の席に戻って、この小説全体の感想を 200 字程度でまとめさせる。
10　今回の授業について、感想をまとめさせる。

＜資料＝空欄本文⑥＞

急須⑥

その夜、こたつの上に急須を置いたままいつまでも腕を組んで座っていた。捨て場所を考えあぐねていたのである。
初めて聴いた臨床講義であったが、患者がたまたま知った人だったという以上に、医学がまさに生きている人間を扱う学問なのだとの印象を強く与えてくれた。学ぶべきものの輪郭が見えてきた。この講義を聴くために大学に行こう。いつまでも急須を磨いているわけにはいかない。
★ちょうど田舎から東京に出るときのように、無言だが力強く背を押す風が吹いてきた。アパートの万年床をたたむ時期が来たらしい。
昔やったのとおなじに、急須を割って新しく出直す儀式をすることばかり考えていたのだが、これはお茶屋の主人がバランスを保証してくれたもので、死にゆく彼との唯一の接点であった。もっと小説の話をしておけばよかった。気軽に店に寄ればよかった。そう思うと捨てられなかった。
結局、部屋の冷蔵庫の上に置いたままにしてあった急須は、その後何度かの引っ越しに耐え、二十年後の今も無傷のまま我が家にある。母や祖母の位牌を安置した仏壇に毎朝茶をあげるのだが、それ専用に使っている。妻が瀬戸物の湯飲みなどと一緒に水洗いしてしまうので艶は出ていない。★

気がつけばあれから一度も急須を磨いていない。

5　生徒たちの授業に対する感想（例）

○小説家の気分を味わうことができて良かった。空欄の前後から、そこに入る内容を創作するのは楽しく、また、他の人の自分の思いつかない意見・アイディアを聞くのも非常におもしろかった。機会があったら、またこの授業形態でやってほしい。（男子）
○物語を予想して読み進める今回の授業は、最初めんどうだと思いましたが、抜けていた本文を読むと、普段以上にそこの文章の深みやつながりが理解でき、とんちんかんな予想を多々しましたが、楽しかったです。（女子）
○何が次に書いてあるのかを予想して、文章の続きを考えて創作するのは面白かった。そして、それをグループになって見せたり、発表しあったりすることで、色々な物語を読むことができて楽しかった。（男子）
○先を考えて、一度自分で考えてから本当の文を読んだので、印象が深まった。自分の予測とは異なっていた時、驚きや衝撃で、内容をよく理解しようと努めるからだと思う。（男子）
○文章を書くことが好きなので、先を推測して自分なりに物語を展開させていくという形式のこの授業はとても楽しかったです。また、自分で続きを書こうとすると、どうしてもそれまでの文章を読み返したり、作者の表現技法を真似ようとしてみたりするので、ことさらに文章全体が強く記憶に残り、登場人物の気持ちをより考えたり味わえたりすることができたように思います。（女子）
○初めて受ける授業のタイプで、斬新でとても面白かった。小説の先を予想し、議論したので、なぜ作品ではそうなっているのか、より深く理解できた。（男子）
○最初は、何をどう書くかで進まなかったが、最後の方はメモを元にして書くスピードが上がったと思う。予想を裏切る展開や、雰囲気にピッタリの表現が使われていることに感心した。（男子）
○自分で物語をつなげなくてはいけないので、細かな描写などにも気をつけて読むことができてよかったです。また、自分で書いてみると、作者が物語に深みを与える表現などを書いていることが、どれほどすごいことなのか分かりました。最後の場面は、自分の考えと作者の描いた結末がかなり似ていて嬉しかったです。（女子）
○今までにない授業スタイルで、最初はどうなるか心配でしたが、実際にやってみると非常に楽しかったです。四十一人もいると、私が思いつかなかったような発想がいつも出てきて、自分の視野の

狭さを感じました。細部までこだわった表現などからも、改めてプロの技量というものが感じられました。ただ、この授業を通して、私は作家には向かないことが分かりました。（女子）

○先を予想して書くのは難しく、書いたものはほぼ全て実際の内容と違うものばかりだったが、その分、実際に書かれている内容をしっかりと読むことができた。また、文章を書くのが苦手だと感じていたので、練習する機会となった。（男子）

○空白の部分を埋めていく作業をやってみると、それまでの話の流れから自分が読み取れていなかったものがいくつもあったことに気づかされた。何でもないことのように書かれていることも、よく考えてみると実は深い意味があることもあり、もっと細部までしっかり読んで考える力が必要だと思った（女子）

○次の展開を考える上で伏線が非常に重要であるということを学んだ。文章のどこかにヒントが隠されているのではないかと思って読むことで、人物の細かな描写や表現に着目できた。また、自分の中で、空欄の展開はこれしかない、周りも同じようなことを考えているだろうと思っていたが、意見を交換することで、正反対のものもあって面白かった。（男子）

○自分で物語の続きを考えてみると、改めて作家の素晴らしさが分かった。自分はまだありきたりの文章しか書けないということを思い知ったが、このような経験を重ね、独自の発想にたどり着けるようにしたい。（男子）

○同じ伏線を見ても、人によって予想する展開が違った。特に、私のグループは男女で意見が分かれることが多く、価値観などの違いが感じられて楽しかった。（女子）

○自分で展開を考えるため、人物像やその時々の状況などを意識して考えることができた。また、普段は何気なく読んでいるけれど、その状況を適切に表現することができる小説家の表現力はすごいと思った。（男子）

○ほぼ毎回創作活動があり、自分で展開を考えながら物語を読み進めるという貴重な体験ができた。ただ、作品を読み合うグループ（メンバー）がいつも同じだったので、違う人の作品も読んでみたかった。（女子）

○ともて面白く、ただ説明を聞いているだけよりも深く考えた。ただ、細かいところや深いところをやるのを抑えてでも、最後に作品全体の流れを捉える時間がほしかった。（男子）

○小学校でも同じような授業をしたことがあるが、今回の方が中身が濃かった。予想を裏切られてばかりだったが、それも逆におもしろかったし、こんなに次のページが見たくてたまらなかった小説の授業は初めてだと思う。（女子）

○今までの全国語の授業の中で一番おもしろかった。ただ話の流れを読むだけの受動的な読書しかしてこなかったが、今回はとにかく感情移入・想像ができ、伏線にも気づくことができた。もっと作家の書いた一言一文を大切に読みたいと思った。（男子）

６　まとめ

生徒たちの感想を読むと、ほぼ意図した授業が展開できたのではないかと思われる。小説をみんなで（教室で）楽しむとともに、生徒一人一人が積極的に本文に関わることで、しっかりと読みを深めることができたのではないかと考える。

一方、年間指導計画がきっちりと決まっており、また、考査を共通問題で実施する関係から、時間の余裕がなく、その結果、芥川龍之介の『秋』を紹介しただけで終わってしまった点や、感想の中にも指摘されている「最後に作品全体の流れを捉える時間」を設定できなかった点などは改善すべき点であろう。特に、細切れにした「部分」の積み重ねの授業を展開しているので、「全体」を振り返る時間はぜひとりたかったところである。

また、感想の中にグループワークのメンバーが固定されてしまうことに対する不満もあった。これは、グループを作成する際の組み方を替えればよいだけのことであり、次回同じような授業をする際には、工夫として取り入れていきたい。